様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２５１０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１７３８３

研究課題名（和文）生徒類型別にみる学校から仕事への移行経路の差異と共通性

研究課題名（英文）The correspondence of student subculture to transition from school to work

研究代表者
知念　渉（Chinen, Ayumu）

神田外語大学・外国語学部・講師

研究者番号：００７４１１６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、生徒類型によって、学校から仕事への移行経路にどのような差異と共通点があるのかを明らかにすることである。その学術的意義は、1990年代までに蓄積されてきた「生徒文化」研究と、2000年代に移行に数多く蓄積された「学校から仕事への移行」研究をつなぐことにある。調査の結果、〈ヤンチャな子ら〉は他の生徒類型に比べて不安定な移行経路を歩んでいる可能性が高い一方、家庭背景が仕事への移行を強く規定していることはどの生徒類型でも共通してみられることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the correspondence of student subculture to transition from school to work. Its academic significance lies in connecting studies of student culture and studies about the transition from school to work. The findings are as follows: First, Japanese lads, called yanchanakora, have an inclination to walk an unstable transition pathway, compared to other students. Second, whatever student types, their transition from school to work is strongly regulated by their home backgrounds.

研究分野：教育社会学

キーワード：学校から仕事への移行　生徒文化

１．研究開始当初の背景

2000 年代以降、「ニート・フリーター」問題に象徴されるように、学校から仕事への移行をスムーズに果たせない若者たちの存在が注目され、数多くの研究が蓄積されてきた。しかし、そうした若者たちと仕事をいかに結びつけていくのかという問題は十分に解決されることなく、依然として重要な社会的課題であり続けている。

本研究に取り組む以前、私は、学校ランク下位におかれた普通科Ｘ高校においてフィールドワーク調査を行い、〈ヤンチャな子ら〉の学校生活やその後の生活を記述・分析してきた（知念 2012, 知念 2014）。〈ヤンチャな子ら〉とは、教師への反抗、喫煙や飲酒、ケンカなどの問題行動をくり返す男子生徒集団である。

この調査の中で明らかになった知見の一つが、〈ヤンチャな子ら〉に特有の大人への移行経路があるということであった。すなわち、〈ヤンチャな子ら〉は、学校やハローワークのような公的機関を経由して就職していくのではなく、親や友人といった私的な人間関係を通じて建築業やホストといった、彼らの有する「男性性」に適合的な職種に就いていたのである。

この知見をふまえれば、Ｘ高校の他の生徒たちは、高校を中退・卒業後、どのような仕事にどのように就いているのかという疑問が出てくる。本研究は、このような経緯で行なわれた。

２．研究の目的

本研究の目的は、計画段階では、Ｘ高校の〈ヤンチャな子ら〉以外の生徒たちの中退・卒業後の生活状況を明らかにし、生徒類型による学校から仕事への移行経路の共通点と差異を探ることであった。そして、その学術的な意義は、1990 年代までに蓄積されてきた「生徒文化」研究と、2000 年代以降に数多く蓄積された「学校から仕事への移行」研究をつなぐことにあった。

次に述べるように、本研究における調査は、計画していた通りに遂行することが困難になり、〈ヤンチャな子ら〉以外の生徒たちの学校離脱後の生活状況を十分に明らかにすることはできなかった。しかし本研究が最終的に見出した知見は、当初予想していたものとは異なる形で、「生徒文化」研究と「学校から仕事への移行」研究をつなぐことの重要性を示すものとなっている。

３．研究の方法

本研究では、インタビューによって、Ｘ高校の中退者・卒業者のその後の生活にせまった。

具体的には、以下の手順でインタビュー調査を行った。

まず、A'ワーク創造館（大阪地域職業訓練センター：大阪市浪速区）と私が共同で行った「生活困窮リスクの高い高校中退者等の実態調査」（A'ワーク創造館 2016）の一環としてＸ高校の中退者・卒業生に質問紙を配布することになったので、その質問紙の最後に、インタビュー調査への協力依頼と、協力していただける場合に記入する名前と連絡先の欄を設けた。そうすることによって、可能な限り多様な中退者・卒業者を対象に含めようと考えたのである。

この質問紙は、郵送で配布し回収する方法をとった。600 通以上の質問紙を郵送したが、郵送で返送された質問票は 30 通にとどまり、回収率は 4.5%とかなり低いものになった。（高校の入学者名簿に記された住所に郵送したが、およそ 150 通は住所不明で返ってきた。つまり、高校入学から 5 年程度で、およそ四分の一の者の実家が引っ越していることになる。したがって、この厳しい回収率自体が、Ｘ高校の生徒たちの家庭背景の不安定さと、学校離脱後に彼ら彼女らにアクセスすることの難しさを示している。）

このような回収率の低さもあって、質問紙調査を通じてインタビューの協力を得られたのは 2 名にとどまり、当初の予想を大きく下回った。そこで、A'ワーク創造館、Ｘ高校の教員、私が追跡してきた〈ヤンチャな子ら〉などのつながりから、できるだけ多くの中退者・卒業生にアクセスし、インタビューに協力してくれる者を募ることにした。その結果、合計して約 10 名にインタビューすることができた。また、当時のＸ高校の進路指導等の様子を把握するために、当時の校長と教員にもインタビューを行った。

また、私がこの研究以前から追跡していた〈ヤンチャな子ら〉にも追加のインタビュー・参与観察を行った。さらに、先述した「生活困窮リスクの高い高校中退者等の実態調査」の再分析も行った。

４．研究成果

本研究の成果は、次の 3 点にまとめられる。

（1）Ｘ高校の生徒類型と移行経路

「生活困窮リスクの高い高校中退者等の実態調査」では、「あなたは高校時代に次のようなことに興味関心をもっていましたか」という問いに対して、28 の文化項目が用意されている（複数回答）。これらの項目（一人も反応しなかった「ラジオ」を除く）に対して、Bennett ら（2009=2017）を参考に、多重対応分析を行った。その結果の一つである第 1 軸と第 2 軸の固有値を表 1 に示す。これを見ると、第 1 軸が大きいほど EDM や K-pop といった項目が並び、カードゲームやニコニコ

動画、２ちゃんねるといった趣味になる。一方、第２軸は化粧がもっとも小さい値で、ストリートダンスや筋トレといったフィジカルな趣味が最も大きい値となっている。

表１．第１軸と第２軸の固有値

	第1軸	第2軸
ダイエット	1.699	-0.642
アイドル	1.628	-1.270
Kpop	1.464	-0.038
洋画	1.180	0.507
ファッション	1.125	-0.495
邦画	0.822	0.841
EDM	0.803	-0.696
化粧	0.749	-3.235
HipHop	0.651	1.015
ロック	0.556	-0.403
筋トレ	0.546	1.693
ストリートダンス	0.400	1.997
サーフィン	0.302	1.301
レゲエ	0.268	1.323
格闘技	0.044	1.225
Jpop	0.039	-0.650
バイク	-0.185	0.772
YouTube	-0.323	-0.413
ライトノベル・小説	-0.376	-1.014
スノーボード	-0.625	0.201
スマホゲーム	-0.666	0.209
漫画	-0.783	-0.110
PCゲーム	-1.309	0.086
TVゲーム	-1.397	0.327
２ちゃんねる	-1.535	-1.055
ニコニコ動画	-1.669	-1.672
カードゲーム	-3.477	-0.560

この分析結果は、私がこれまで行ってきたＸ高校の参与観察の成果と整合的なものである。理念的には、第１軸を横軸、第２軸を縦軸として、次のように示すことができるだろう（言葉は、〈ヤンチャな子ら〉が日常的に用いたものを適用した）。

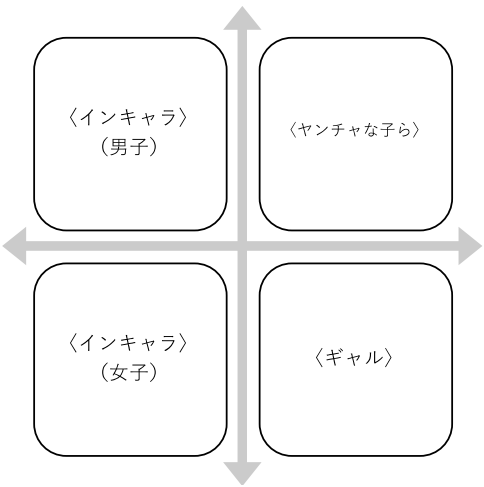

図２．Ｘ高校の生徒類型

1990 年代までに蓄積されてきた生徒文化研究では、学校に対する価値や行動に関する質問項目を用いて生徒文化を類型化することが多かったが、本研究では文化項目のみに多重対応分析をすることによって、生徒類型を抽出した。このような方法をとることで、向学校的－反学校的という説明図式ではもはや説明することができないような、現代的な生徒文化を分析することが可能になるだろう。例えば、以前の研究では、学校に向かう価値・行動によって生徒を類型化することが多かったが、本研究の分析方法を用いれば、文化項目によって生徒を類型化し、それらと学校に向かう価値・行動との対応関係を分析する、というような新たな地平が開かれるはずだ。

ただし、本研究では、この生徒類型が、中退・卒業後の生活状況とどのように対応しているのかという点は十分に明らかにすることができなかった。回収できた質問紙の数とインタビューの対象者数が少なかったためである。

もっとも、そうした限界を抱えているために一般化するには慎重にならなければならないが、〈ヤンチャな子ら〉の方が他の生徒類型の者よりも不安定な職業生活を送っている傾向にあることは明らかになった。また、どのような生徒類型であっても、学校から仕事への移行過程において家庭の状況が大きく関わっていることも明らかになった。例えば、仕事を辞めた際、家庭が安定しているケースではそれを次の転職や進学に向けた機会になっていたが、家庭が不安定なケースでは、失業がそのまま衣食住すらままならない状況に陥ることになっていた。こうした点は、どの生徒類型においても共通して確認できた。

ただし、上述した差異や共通点は、回収方法の違いに起因する偏った観察の結果として見出されたものかもしれない（〈ヤンチャな子ら〉は私が直接アクセスしたのに対して、他の生徒には郵送等でアクセスしている）。また、ケース数が少ないために、偶然生じたものとも考えられなくもない。

以上をふまえれば、今回の調査設計・分析方法の到達点と課題をふまえ、より大規模な調査を行うことが必要だと思われる。その際、一つの学校だけでなく、学科や学力ランクをふまえて複数の高校で行うことが望ましいだろう。

（2）〈ヤンチャな子ら〉の歩む二つの経路

本研究の一環として〈ヤンチャな子ら〉への追跡調査を行うことによって、一見、一つの集団にみえる〈ヤンチャな子ら〉のなかにも、相対的に安定した経路を歩む者たちとより不安定な経路を歩む者たちがいることが明らかになった。しかもそれは、家庭背景の不安定さや高校時代の集団内部の地位と対応関係にあることがわかった。

それぞれの経路を、①地域との関係、②学校内における友人との関係、③家族・学校との関係、④仕事に活用する社会関係、という四つの点から整理すると、次のようになる。

○比較的安定した経路

①親世代から同一地域に住み続けており、地域の中に親の知り合いが多い。

②小さい頃からの友人や「幼なじみ」が多く、そのなかには、親同士が知り合いの場合もある。

③家族の仲が良く、強固に家庭の文化が存在する。そうした家庭の文化を土台にして一貫したアイデンティティを構築しているが、それがフォーマルな学校文化と葛藤を起こす。

④「親戚」や「幼なじみ」といった近しい関係を通じて、工場労働や配送業など、比較的安定した仕事に就いていく。離転職は少ない。

○より不安定な経路

①居住地を転々としながら育ってきて、親の家庭外のつながりが乏しい。

②小中学校時代にいじめられた経験をもつ。いじめられていた者にやり返す、さらに地位の高い者との関係を築く、といったことによっていじめから脱却する。

③家庭はより不安定で、家庭の文化と言えるものが強固に存在するわけではない。家族についての語りは流動的で、家庭は一貫したアイデンティティを構築する場となりえない。

④「居酒屋で会った人」などのように、即興的なつながりを通じて、夜仕事や雇用関係が不明瞭な、より不安定な仕事に就く。離転職が多い。

高校時代の生徒集団内における地位が、生まれ育った背景と、中退・卒業後の生活と対応しているという本研究の知見は、「生徒文化」研究と「学校から仕事への移行」研究とをつなぐという本研究の学術的な目的にてらして、極めて重要である。

他の地域や学校、生徒集団に対象を広げて本研究の知見の頑強性をより確認していくことが求められる。

なお、今後、この点については書籍化する予定であることも付記しておく。

（3）中退者・卒業者を追跡する調査方法

最後に、本研究をふまえて、中退者・卒業者を追跡する調査方法について記しておきたい。この点は、本研究の反省点であるが、調査を行なって分かったという意味では成果でもある。

今回のインタビュー対象者数が少なくなってしまった原因は、その協力依頼を広く呼びかけるための質問紙調査において、回収率が低かったことにある。しかも、四分の一は住所が変わっていた。これらの事実自体が、本研究が対象とした若者たちの生活がいかに不安定で困難であることを示唆している。

これらのことをふまえて、高校生の中退・卒業後の追跡調査をする際には、次のようにすることが望ましい。

第一に、質問紙調査への回答のインセンティブを高めるために、謝金などを用意することである。今回の調査では、インタビュー調査に協力した際には 2000 円相当の商品券をお渡しすることを明記したが、それでも回収率は低かった。質問紙調査に答える時点で、なんらかの謝金を用意した方がいいのかもしれない。

第二に、サンプルサイズを小さくしてでも、郵送調査よりも個別面接調査などの方法で行った方がよかったのではないかと考えられる。600 通以上送っても 30 通しか返ってこなかったことを考えると、例えば 150 通に限定して回収率を高めた方がよいだろう。あるいは、学校を経由した調査であることを活かして、同窓会役員などと連携し、同窓会を開催し、そこで質問紙への回答を求める、といった方法も考えられる。

第三に、高校を卒業する前に協力をお願いしておく方がよいだろう。その際に、協力の可否と連絡先（メールアドレスや住所など）を確認しておくと、その後の調査がスムーズに行えるはずだ。そこでメールアドレスなどを書いてもらえれば、紙媒体ではなく、インターネット上のサービスなどを利用して質問紙調査を行うことも可能になる。

今後は、これらの点をふまえて、本研究で見出された知見を発展させうる調査研究が必要になるだろう。

【参考・引用文献】

A'ワーク創造館, 2016,『生活困窮リスクの高い高校中退者等の実態調査及び再チャレンジ支援モデル事業　事業報告書』。

Bennett, T., et. al., 2009, *Culture, Class, Distinction*, Routledge. （=2017, 磯直樹ほか訳『文化・階級・卓越化』青弓社）

知念渉, 2012, 「〈ヤンチャな子ら〉の学校経験」『教育社会学研究』第 91 集, pp.73-94.

———, 2014, 「『貧困家族であること』のリアリティ」『家族社会学研究』第 26 巻第 2 号, pp.102-113.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 知念渉, 2017, 「〈インキャラ〉とは何か」

『教育社会学研究』第 100 集, pp.325-345.

② 大前敦巳・石黒万里子・知念渉, 2015, 「文化的再生産をめぐる経験的研究の展開」『教育社会学研究』第 97 集, pp.125-164.

〔学会発表〕（計 1 件）

① 知念渉, 「〈ヤンチャな子ら〉の学校から仕事への移行:安定／不安定を分かつ社会関係資本」（日本教育社会学会第 67 回大会（駒澤大学）2015 年 9 月 9 日)。

〔図書〕（計 3 件）

① 柏木智子・仲田康一・枝元哲・西尾誠子・山田文乃・知念渉・入江誠剛・上田さとみ・畠山久子・永山美子・椋本洋・奥田麻依子・武井哲郎, 2017, 『子どもの貧困・不利・困難を超える学校』学事出版。

② 片山悠樹・内田良・古田和久・牧野智和・中西啓喜・白川俊之・林明子・伊藤秀樹・寺沢拓敬・加藤一晃・妹尾麻美・知念渉, 2017, 『半径 5 メートルからの教育社会学』大月書店。

③ 岡部美香・佐々木暢子・高田俊輔・森岡次郎・上林梓・國崎大恩・近藤凛太朗・知念渉・馬上美知・藤高和輝・髙橋舞・古波蔵香, 2017, 『子どもと教育の未来を考えるⅡ』北樹出版。

6．研究組織

(1)研究代表者

知念　渉（CHINEN, Ayumu）
神田外語大学・外国語学部・講師
研究者番号：　00741167